

環境思想における地理的要素の考察

環境と地理の相関

A study on geographical element in an environment thought

— The environment and geographical correlation —

海上 知明[※]

Tomoaki Unakami[※]

要 旨

In recent years environment issues are becoming more serious and more global. But there were no global environmental issues in ancient age. Those have evolved with the civilization of human being. In that current, people have struggled against the evolution and formed thoughts to deal with it from time to time. We need to review the history of the civilization and those thoughts to find the solution of recent environment issues. For this purpose this paper examined geographical aspects of the historical environmental thoughts, particularly 'A god within' of Rene Dubos and 'Small is beautiful.' of Ernst Friedrich Schumacher. Dubos insisted the geography or the place mattered for environmental thoughts. The inner structure of the system, which is formed in the given geographical conditions, has a strong influence on the shifting and the development of the system. Each place has its own ethos which grows autonomously and shapes its physical appearance and the way of how there people think. When a place or a culture changes, that change happens only in the historical continuity, and, therefore, original characteristics of the system remain, even in a drastic change. Dubos insisted environment though origin from the geography and the climate.

キーワード：environmental thoughts.

A god within
eographical conditions

はじめに

地理と環境は密接な関係におかれている。環境という概念そのものが、地理的条件に不可分な関係にあるのである。本論文は環境問題が悪化し、様々な環境思想が勃興し、さらに環境政策が考案されていく中で、これら環境に関わる諸分野において地理的要因はいかなる位置づけを有するかについて、特に環境思想の側面からの考察である。

環境と地理的要因の相関については、「環境問題」への意識があまりみられない分野でも存在していた。たとえば梅棹忠夫氏は日本の植生を大きなユーラシア大陸の中で位置づけたが⁽¹⁾、これは佐々木高明氏などによって日本の基層文化形成と結びつけられていき⁽²⁾、日本文化として今日も見られている思考法などの大本とされた。この流れから、さらに環境問題悪化に対応した新しい時代の文明を形成するものとして日本文化を見直す動きまで現れている⁽³⁾。しかしこうした流れとは別種に自然環境保護の視点からも環境と地理の相関はあらわれていたのである。

※日本経済大学経済学部経済学科

環境思想と地理的要因の関係

環境と地理の関係が特に強く見られるのは環境思想の側面である。今日、環境思想は多様化している。現代環境思想が勃興する契機となった1962年以降⁽⁴⁾、様々な環境思想が登場してきたが環境問題の根幹や対策を巡って各種対立した意見が出されている⁽⁵⁾。

しかし多様な環境思想を横断する共通項がある。一つは小規模の重視、一つは多様性の重視、一つは地域生態系の重視である。

小規模化については比較的初期に登場した環境思想であるエルンスト・フリードリッヒ・シューマッハの『スモール・イズ・ビューティフル』に代表されている。多様性はエコロジーの価値そのものとされている。地域生態系もアルド・レオポルドの「土地倫理」提唱の時代から意識されていた。これら是对立するエコロジストどうしても共有されている価値観と呼んでも過言ではないだろう⁽⁶⁾。

もちろんこれらも一般的な思想形成上の特質を見せていて、時代が後になればなるほど理論的には精緻化されていく。この中でも地域生態系をレオポルドとは異なった形で取り上げていた初期の理論家にルネ・デュボスがいる。

デュボスは地理的要因と社会の関心に注視している。場所の特性、場所の精神というものが存在していて文化、経済など様々な分野に影響を与えるものとみなしているのである。「景観、あるいはそこに住む人々の独自性は、その場所の持つ一群の属性によって決定されている」⁽⁷⁾、そして「ひとつひとつの場所は、その場所独自の精神を持っていて、その精神が発達するにつれて、その場所の物理的外観や、そこに住む人びとの思潮を形づくっている」⁽⁸⁾。

地域の独自性や社会の連続性の持つ影響力の一つの例として取り上げられているのが、日本のトヨタ自動車が交通事故犠牲者の冥福を祈って仏像を安置した社を建立したことである。これは欧米ではみられない日本独自の「社会文化的痕跡」⁽⁹⁾である。「ひとつの場所やひとつの文化の中で変化が起こる時、その変化はすべて、歴史的連続性という枠の中でのみ起こるのであり、それゆえ形態が大きく変わることが多いにしても、もとの特徴を残しつつけるものである」⁽¹⁰⁾。このように、地域や社会といった所与のシステムの「内部構造がそのシステムの次の段階への発達に支配的影響を及ぼす」⁽¹¹⁾のである。場所の影響の重要性はデュボスの思想の支柱の一つである。

自然的・文化的な諸影響力は、技術的・政治的命題を克服するほど強力である。デュボスによれば nature とは「地理的、社会的、あるいは人間的な現象ばかりではなく、わけても、実在の表面下にかくれたすべての『力』なのである」⁽¹²⁾と述べる。家屋・公園・工場・ビルディングなどの人造物の建設ににさえも土地の力は見られている。民族単位の味覚、美的感覚、性的興奮、倫理・道徳、宗教、実に多くの側面での背景に存在している大本は地域単位の自然環境ということになる。

個々の生物としてみても環境は重要である。学習能力、行動パターン、解剖学的構造、身体の大きさ、生理機能、寿命は環境によって左右される。デュボスも「人間のあらゆる側面で、遺伝が重要であるということを認めるとしても、社会勢力、環境条件、歴史的な偶然」⁽¹³⁾などの方がいっそう重要な要素だと考えているのである。「環境全体－感覚的環境と概念的環境－は、多くの側面で、この初期段階の条件づけで一役買っている」⁽¹⁴⁾とされている。すべては概念的環境の中に生きているが、そ

の概念的環境がそれぞれの倫理的・社会的態度を決めるのである。たとえば進歩の本質についての意見、宇宙の秩序における人間の位置についての観念、神という言葉とかかわる態度などがこうして決まるのである。

生活環境という点も、社会だけでなく自然からの影響も大きい。人間の内側は季節に反応するが、それは「人間が自然とあまりに密接に生活していたので、身体の機能も心の反応も自然の四季の移り変わりや天然資源の利用の可能性にきちんと合わせない限り、生き残ることが不可能であった」⁽¹⁵⁾時代に遺伝素質に組みこまれていたものとされている。環境と生物学的本能、そして意志によって個性は形づくられるのである。

自然と社会を連動させる視点はセルジュ・モスコヴィツシなどにもみられている。モスコヴィツシも人間は「自然の人類史と呼んでいるものの構築に参加している」⁽¹⁶⁾とみなしているのである。日本においても飯塚浩二氏は「人類の地域社会をその郷土との関係、その社会が占有し、またその生活を依拠せしめている土地との関係において考察する」⁽¹⁷⁾ことを指摘した。

しかしモスコヴィツシが社会から自然を眺めているのに対して⁽¹⁸⁾、デュボスの視点は自然から社会を眺めているという点でより文化的になっている。そして「原野主義」⁽¹⁹⁾と対峙するかのようには人間が手を加えた環境であっても地域と密接に結びついていれば価値があるものとみなしている。本当の環境というものは、自らの感覚によって知覚できる環境、あるいは身体に影響をあたえる環境なのであると考えているからである。いわば人間あつての環境とも言える。それに、あるがままの自然と考えられているものの自体が人工のものであることが多いのである。人間は太古の昔より生活するために農業努力をしてきた。有史以来ほとんど変わらず、それゆえに私たちにとって老いることがないかにみえる景観は、実は人工の結果なのである。こうした人工の景観は、場所の精神が生みだした人間精神によるものなのである。

「北アメリカの原始林の多くは、農耕文明以前のインディアンが火を放った結果大草原へと変貌した。その草原植物相は、世界でも最も豊かな土壌のひとつとなった。やがて農作物がこれにとってかわった後でも、草原のイメージは、いまなおアメリカ人の心のなかに焼きついて残っている」⁽²⁰⁾。確かに「歴史のあるところ環境の破壊がともなう。古代の最も繁栄を極めた土地ですら、一種、呪われてきたかのようにみえる」⁽²¹⁾。従って、「悲観主義者は、文明は必然的に環境を崩壊させるという彼らの主張についての歴史的論拠には不自由しない」⁽²²⁾。しかし、「日本の農業は1000年以上もの間、土壌の肥沃度を低下させたり景観の美をこわすことなく、一貫して高い生産性を維持してきた」⁽²³⁾のである。

人間は自然を創ることができるし、回復させることもできる。人工の生態系もまた素晴らしいものである。ロデリック・ナッシュは、啓蒙された人間中心主義というデュボスの思想は「人類は世界に責任を負っているから『自分にもっとも役立つように自然を操作する』ことができるし、そのようにしなくてはならないが、常に自分たちではなく、神が所有する物に敬意も忘れてはならない」⁽²⁴⁾のものであると要約している。「工業化によって自然に加えられた損害を補修することは、われわれの力の及ぶ範囲内に充分あるであろうが、しかし、現代生活のための新しい積極的な価値観を構築することははるかに困難であろう」⁽²⁵⁾。

技術が現在の思想の延長上に発達することをデュボスは危惧している。「破壊を予言する真の張本人は、人類が自滅の道を歩んでいるとみなす悲観主義者ではなくて、未来が単に現在の成長したものとかその延長上のものとか考える誤解もはなはだしい宿命論者」⁽²⁶⁾、楽観論者たちなのである。逆に、悲観論そのものに対しては楽観的な見通しを述べている。「大部分の生物は大きな適合性をもっている」⁽²⁷⁾。これはジェームズ・ラヴロックがガイア論で示したガイアの楽観論とならぶものである。危険なのは生命そのものの破壊ではなく悪化が進行しつつあることなのである⁽²⁸⁾。

デュボスの導き出す結論は、自然環境破壊によって自然環境が激変すれば、仮に人類が存在し続けるとしても従来の自然環境のもとに生まれた種族とはまったく異なる存在になるという危惧とともに、自然環境保護はその地域の文化にあわせた形で行うべきだというものである。具体的な提言はなされていないが、その政策とは地域文化とともに自然など地理的な要因に基づいたものとなる。

小規模化の思想と地理的要因

デュボスが地理的な要因から環境思想を構築していたのと同時代に、小規模化の意義を提唱したのがエルンスト・フリードリッヒ・シューマッハである。デュボスにあっては国や民族単位での言及が多いのに対し、シューマッハは小規模な共同体と地域との関わりに向かう要素が出ている。

シューマッハは端的に小規模の利点を述べている。「小規模な事業は、いくら数が多くても、一つ一つの力が自然の回復力と比較して小さいから、大規模な事業と比べて自然環境に害を与えないのがつね」⁽²⁹⁾であり、さらに『混迷の時代を超えて』の中で「小規模な技術を持っていれば、もちろん、環境問題の大半は解消します。自然には許容限度というものがあるからです。つまり、小ぜりあい程度なら自然はこなしちゃいますが、大規模な攻撃は駄目です。小規模な技術を持っていれば、そして小規模な技術を持ちさえすれば、人口の分布を改善することができます」⁽³⁰⁾と論を展開する。人間は小さい、だから美しいとシューマッハは考えている。ダム利用の水力発電、火力発電、原子力発電、自然エネルギー利用の有無にかかわらずすべて等しいのは大規模発電であることと、事故を引き起こしたときの災害の巨大さである。原子力発電も、原子炉がこぼし大ならチェルノブイリのような広範な汚染にはつながらなかったのではないか。

ディープ・エコロジーの名付親アルネ・ネスは、シューマッハの思想に全面的に賛同しているが、ディープ・エコロジーの名の由来となった1973年の講演の中で、地域自治と分権化を提唱し、海外輸入に頼っている地域に比べて消費エネルギーは5%としている⁽³¹⁾。シューマッハは『スモール・イズ・ビューティフル』の中では50万人の都市について述べているが⁽³²⁾、『混迷の時代を超えて』では、20万から30万人以下の人口をもった都市を理想としている⁽³³⁾。これはシューマッハの故国ドイツの中小都市をモデルにしているからだと思われる。

この小規模化の思想と結びついた自治思想は立場が異なる多くのエコロジストにより共有されている。どの程度の人口を基盤に考えているのか概観してみるとルドルフ・バーロは3000人を、カークパトリック・セルは5000人～1万人を、マレイ・ブクチンは工業化以前の都市規模をそれぞれ述べている（ヨーロッパの中世都市と同様に1000人程度か）。ゴールドスミスは、1つの近隣社会に500人、1

つの共同体に50000人、1つの地域に50万人、その上に国家があるという脱中央集権社会を考えている。

小規模共同体の思想はヨーロッパにおいてはポリス以来の伝統とも言える。歴史的にも小規模コミュニティについては様々な規模が提唱されている。たとえばアリストテレスは理想的ポリスを5040人で構成されるものとし、ロバート・オーエンは2000人のコミュニティについて述べている。リービヒも1マイル平方に2000人の人口が自給自足に適していると考えていた⁽³⁴⁾。マルクスやアナキズムにおいてもパリ・コミューンがモデルを提供している。共通しているのは、大規模な社会がもたらす数々の弊害を小規模社会はくい止められるということである。特に環境問題については、小規模な社会と経済は解決への大きな期待がよせられている。

『スモール・イズ・ビューティフル』の中では小規模の利点とともに、具体的な経済のあり方として中間技術と仏教経済学の主張が行われている。シューマッハの科学・技術観は、身体の大きさに合わせたというものである。ここから発展途上国に対する「中間技術」が提唱される。発展途上国に必要なのは最先端技術ではなく、発展状態と労働状態に合わせたものである。先進国の技術が「資本集約」タイプとすれば、発展途上国が必要とする技術は「労働集約」タイプとなる。発展途上国の開発努力の中心となるのは、この「中間技術」を活用する非近代的部門となる。一律でない多様な経済のあり方が提唱され、国そして地域の経済レベルにあわせて技術も利用していけば良い。

シューマッハは、1955年にミャンマーを訪れ、仏教徒の生活から、仏教経済学を提唱した。新しい経済学は成長の意味を質からとらえるものである。シューマッハは驚くほどわずかな手段でもって十分な満足を得ている仏教徒の生活を理想とする。ティモシー・オリオーダンは、仏教経済学こそがシューマッハの共同体哲学を象徴するものとみなしている⁽³⁵⁾。

仏教徒の目的は解脱であるが、仏教は中道であるから物的な福祉を敵視することはない。それは「適正規模の消費で人間としての満足を極대화」⁽³⁶⁾しようとするものである。従って、物事を機能から眺めなおす合理性を持っている。移動のむだを考えれば、遠隔地からの輸入も輸出も不経済である。レンガの価格が高くなっているのは運賃がかかるからで、消費者の立場にたち価格を下げるためにはミニ・レンガ工場を各地域に建設すればいい⁽³⁷⁾。シューマッハ自身が関わったスコット・バーダー社では組織人員を400人に制限し、地域社会との関係を密接なものにすることで大きな成果をあげている。食事と経済の相関も美食と対価の効用は仏教経済学の視点では地域の旬の特産物を食べるのが対価に対して一番効用が高いことになる。

「無数の小規模な自治組織の自由が必要」⁽³⁸⁾としながらも、シューマッハは大規模にも利点があることを認めている。そこで大企業ながら、小規模会社の連合体とした例を上げている⁽³⁹⁾。小規模な工場は自給原則にのっているが、小規模会社の連合のような形で一つの組織を作り上げるエコシステム型組織は社会にも投影できる。それは画一性への批判からもうかがわれる。

画一性は生産にだけみられる問題ではない。画一性は現代社会の傾向を反映しているものとしこう述べられる。「画一性は現代社会が自然に押しつけているものです。たとえば、農業は今でも土壌の成分を使いつくし、遺伝子供給源を減少させるような単一栽培となってきました。また、画一性は巨大な組織、巨大な生産単位、大量生産、標準化、機械化、そして人間に関しては大量教育を通じて

社会の中に根を張っています」⁽⁴⁰⁾。一見類似しているが、統一性は画一性は異なったものであるという。統一性はわれわれが一番知らない次元であるとして以下のように述べている、「統一性は神となんらかの関係があります。そして多様性と複合性はわれわれの住む地球となんらかの関係があります。そして画一性は、地獄となんらかの関係があります」⁽⁴¹⁾。多様性の中での秩序と統一という姿は、自然の姿をモデルにしている印象をあたえている。

思想の理論的精緻さは後年になるほど高まるが、シューマッハ思想では萌芽的に地域特性と小規模化の関係が示されていたにすぎない。しかしこの思想は単なる小規模化ではなく、デュボスの述べているような土地の特性を勘案して、どのような地理的区分で自治を行うかという方向に発達していき、生命地域主義の思想につながっていく。

生命地域主義

生命地域主義の思想はシューマッハの小規模化の思想の延長上に理論を展開している。生命地域主義の語源については諸説がある。ピータ・バークの造語であるとされるが⁽⁴²⁾、1974年にはアレン・ヴァン・ニューカークが使用していたことをビル・ディヴォールは指摘している⁽⁴³⁾。その根本はフレデリック・クレメンツとヴィクター・シェルフォードが1930年代にみだしたバイオーム・システムにあるとキャロリン・マーチャントはみているが⁽⁴⁴⁾、植生地理学はドイツ地理学の伝統である。同時に、生命地域主義の理論家カークパトリック・セルは、その理論の大本がシューマッハと同じ視点にあることを述べている⁽⁴⁵⁾。セルが指摘するシューマッハの視点とは、自然に学ぶという姿勢である。

生命地域とは、地球の表層を自然によって区分する方法で、動物相、水、気候、土壌、地形、そしてこれらの特質を背景にもった人間の共同社会や文化によって分けられる。ジム・ドッジによれば、動物相や植物相に15～25%の相違がみられれば異なった生命地域であるという。さらにゲーリー・スナイダーは河川流域の広がり注目している⁽⁴⁶⁾。

生命地域主義の理論家カークパトリック・セルによれば、地域は自然によって階層別に何段階かに区分できるという。大分類は、自生の植物や土壌の区切りによるもので、セルはこれを生態地域(ecoregion)と名づけている⁽⁴⁷⁾。その範囲は数十万平方マイルにも及び、アメリカ全土で40～50ほどの生態地域が存在するという。この生態地域の中で、さらに土地の表層一分水界、川の流域、渓谷、砂漠、高原、山脈一によって境界が定められるという。セルは、この中分類的に区切られた地域を、地理的地域(georegion)と名づけている⁽⁴⁸⁾。さらに、地理的地域の中に数千平方マイルのより小さな地域が存在する。この境界は、地域固有の構造的特徴、居住者、文化、農業などの特徴により引かれるもので、セルはこの地域を生活地域(vitaregon)と名づけている⁽⁴⁹⁾。セルによれば、こうして区分された地域ごとの経済は、自然の様態・法則によって特徴づけられるという。小規模経済ではあっても、そこでは自然のシステムが強調されることとなる。

セルの区分する地域階層レベルも、世界各地を網羅してみると、小規模とは言い難いのではという指摘も出てくるかもしれない。生命地域の定義において民族や文化を重視すれば、領域の広がり様々なものとなるからだ。遊牧民族や狩猟民族の生命地域は広大なものになるが、閉鎖的な農耕民族とも

なれば、かなり限定されたものになってくる。ゲーリー・スナイダーは、バイソンを追ってアメリカの中西部に生活した先住民族の広大な領域と、生まれた集落から50キロメートル以上離れることがなかったカルフォルニア北部の先住民族の狭い領域とを比較している⁽⁵⁰⁾。しかし、どちらも同じように土地に根ざして生き、領域の中で自律した生活をおくっている。自律した生活は、小規模・文化・自然と組合わさり生命地域主義を形成する骨格の一つとなっている。広大な領域をもつ民族も、最小のコミュニティともなれば小規模なものとなってくる。

エドワード・ゴールドスミスによれば、熱力学の法則の法則は蒸気機関のような閉ざされたシステムから導きだされたもので、生物圏のような解放システムには適用できないとされる⁽⁵¹⁾。リフキンのエントロピーの法則についてはメラーやコモナーらも批判しているが、ゴールドスミスは、熱力学に代えて生態力学を提唱する。

生態力学では、①保存は行動の基本目標であるが、そこでいう保存とは構造である。②自然のシステムは、安定と極相に向かう⁽⁵²⁾、としている。極相で自然のシステムの成長は止まるが、生命地域で誕生する経済とは、この極相とバランスのための条件の経済学である⁽⁵³⁾。それは、ハーマン・ディリーが言う「定常状態」⁽⁵⁴⁾、ボールディングが言う「宇宙船」の経済でもあり⁽⁵⁵⁾、自然界を維持し、自然界に適応し、自然界の関係やシステムを保存するものである。

従来は経済が追い求めてきた、成長・変動・消費による「進歩」ではなく、「安定」を追求した経済とも言える。ながらく経済は自然と分離して存在していたと、セルは考えている⁽⁵⁶⁾。自然と経済学の分離についてはハンス・イムラーも述べているが、生命地域主義の経済は、より積極的に自然と経済を融合したもので、オイコスのように経済と生態系を一致させている⁽⁵⁷⁾。

生命地域の経済学とは、エネルギー・生産・資源の代わりに保全とリサイクルを、そして汚染と廃棄物と資源使用の最小化を中心とした経済である。すなわち最小限の財と最低限の環境破壊、再生可能な資源の最大利用、人間の労働や工夫を最大限の利用。食物は、前農業の状態で育つ土地固有のものを主体とする。生命地域主義の農業の特徴としては、有機農業、病害虫管理、継続的複合経営農業、養殖、パーマカルチャー、温室利用などが上げられ、それで季節的・地方的食糧を生産していくことである。

エネルギー面では、主軸とするのは太陽エネルギーであるが、これも地域特性を活かし、河川、薪、風力、雪などを利用するものもある。工業は、耐久性や質にウェイトをおき、土地の職人・職工による、天然資源を利用した非汚染工程を中心として営まれる。輸送面では、列車や電動車両だけでなく人力機械や自転車も使用する。こうした地域的・季節的食糧、地域特性のエネルギー、職人の工業、人力の利用といった点は、シューマッハの提唱した仏教経済学や中間技術と類似している。生命地域主義の経済は、エネルギー集約ではなく労働集約タイプとなる⁽⁵⁸⁾。

地域を限定することで、エネルギーの直接利用、持続可能な資源利用、廃棄物の還元が可能になる。そのための基本が自給自足となる。自給自足の生命地域主義は、中央政府・多国籍企業・海外紛争とは無関係に存在することになるから景気・不景気、石油危機、貿易赤字に左右されず安定したものとなり、遠距離の市場に出す必要がないから、殺虫剤も農薬もビニール梱包も不要となってくる。セルは、地域通貨の必要すら示唆している。そこでの政治も、適正規模、脱中央集権的、分割、多様性と

なっている。生命地域主義の理論は、自然をモデルにしているが、自然の示すモデルとはバランスと調和、共同体内部の協力、環境への調和、多様性、複雑性、融通性である。これらの内容はソーシャル・エコロジーの理論に類似している。

生命地域主義はエコシステムの応用と言えるが、ソーシャル・エコロジーで言うところのエコシステムもこれとほとんど同じ意味を持っているし、アトキンソンなども生命地域主義と類似した主張をしている。もともとエコシステムという言葉は1935年にアーサー・タンズレーがコミュニティという擬人用語の代わりに創った用語で、一つのシステム、たとえば池とか森林とかの中での栄養サイクルやエネルギー循環が完結していることが注視されている⁽⁵⁹⁾。これが自給自足的でその中に生態系が完結している単位の地域を意味するようになっていったのである。

しかし、セルは自然の持つ多様性・複雑性の解釈はマレイ・ブクチンなどとは異なっている。自然が多様で複雑なように、政治形態について、画一的な政治価値を押しつけることをせず、地域単位に様々な政治システムが存在しても良いとしているのだ。ソーシャル・エコロジー理論では直接民主政治のみが環境問題を解決するものとしているが、セルもシューマッハ同様完全なシステムが人間を完成させるとは思っていない。セルによれば、人間はあるがままでよい、ただし過ちがおこった時に、それを一定範囲内に留めるような社会機構と市民機構が必要なだけであるという⁽⁶⁰⁾。

この点で生命地域主義は現実的と言える。伝統的にアナキズムの理論は楽観的な性善説で、人間の支配機構が破壊されれば人間の善なる部分が全面化するとみている。ブクチンのソーシャル・エコロジー理論も基本的には同じで、リバータリアンの自治ができれば人間の利己的な性質は打ち消さざるをえないとしている。エカズリーは、生命地域主義もエコ・アナキズムの一種とみているが、生命地域主義とアナキズムの共通点は小規模経済という点であってアナキストが重要視する政治面を生命地域主義は重視していないし、相互依存より自給自足を重んじている。社会派エコロジーの理論は、総じて私利私欲のない社会主義の人間が社会主義システムとともに登場するという幻影をいだいている。

一方、ディープ・エコロジーの理論では、自然や地球と内面で一体化した人間を考える。具体的に、どのような方法でそうした人間ができるかの提示はあまりみられないが、ニュー・エイジ思想が求める超人こそがそうしたガイアと一体化した存在とされているのだ。しかし、セルら生命地域主義者は、みたことがないような人間の出現に期待しないし、そうした人間を登場させるシステムも期待していない⁽⁶¹⁾。世界をあるがままに把握し、自然から逸脱した社会システムを自然の姿に近づけようとするのである。

反面、地域に焦点をあてすぎることは、地球全体におよぶコンテクスに目が向かなくなる、あるいは土地の固有性の強調は、外来の意義を抹殺するだろうという批判もある。ウォルター・トゥルエット・アンダーソンは、自然のエコシステムとされるものも、しょせんは恣意的に選ばれたある瞬間のスナップにすぎないとしている⁽⁶²⁾。しかし、この批判はセルがアメリカ先住民族の生活を理想としてることを無視している。アメリカ先住民族は、非常に長期に渡って生命地域主義的な生活をしてきたのだ⁽⁶³⁾。

社会派エコロジーからの批判は、セルが生命地域主義が政治と無関係に実施できるとしている点に向けられている。資本主義、大企業、政治といった存在に焦点をあてての分析は基本的な環境悪を規

定しているため、それを直接的に批判しないことは根本的解決にならないとみなしているのだ。しかし、小規模な政治・経済単位は、大規模化の問題を解決することにより間接的にそれらを解決していることになる。

バリー・コモナーのような立場では、生命地域主義も「自然の権利」やディープ・エコロジーと同じく、生命中心主義の範疇に入ってしまうし、ビル・ディヴォールもガイア論と並んで生命地域主義をディープ・エコロジーを補強するものとみている⁽⁶⁴⁾。しかしこれらはかなり違った理論である。ジェレミー・リフキンはむしろ現実政治との軋轢を指摘する。「生命地域的な利害と国家および多国籍企業の利害との軋轢は全世界で強まりつつある。1990年現在、49の国々で独立を求める103の分離運動が起こっている。これらのほとんどは、民族的・宗教的・人種的にそれぞれの国と国家政策となじまないグループが自前の領土を要求するものである」⁽⁶⁵⁾。これが生命地域主義の最大の課題かもしれない。

カークパトリック・セール以外に、ピータ・バーグ、レイモンド・ダスマンらがスモール型の経済を主張している思想家で、総じて生命地域主義者と呼んでもさしつかえないであろう。ディープ・エコロジストのゲリー・スナイダー、ビル・ディヴォール、ワーウィック・フォックスらも生命地域主義を高く評価している。地方分権、個人の社会参加、文化的多様性、地域単位の自給自足などが生命地域主義者の主たる論点である。これらのすべてを、一極集中型の日本のような国に適応はできないであろうが、様々な修正をすることにより、かなりの効果をあげることができそうである。そして、もし日本のような国で成功すれば、それは人口過剰に悩む発展途上国に対するモデルとなるであろう。

終わりに

以上のように環境思想において地理的要素は欠くべからざる要素となる。

生命地域主義の思想で日本を見ていくと、植生上の区分が梅棹忠夫が区分したように三種類にわかれ、四つの島、平野と山脈の区分と続き、さらに方言などによる文化的区分、河川などによる地域生態系へと区分が細分化し、地域文化と地域生態系に合わせた自治区分へとなるだろう。各地区はエコシステムの経済と多様なエネルギー供給での自立かを勧めることになる。

そして環境思想が具体的な政策に移行していく時、地理的要素は全面化していく。特に環境思想と地理的条件を結びつける政策となるのは「独自性」と「自律」である。これが多様な自然風土にあって多様な自治区分になっていく。その中で地域生態系に合致した様々な政策が実施されることになるのである。

注

(1) 梅棹忠夫 (1967). 『文明の生態史観』, 中央公論社.

(2) 佐々木高明 (1993). 『日本文化の基層を探る ナラ林文化と照葉樹林文化』, 日本放送出版協会、佐々木高明 (2000) 『多文化の時代を生きる 日本文化の可能性』, 小学館、佐々木高明 (1997). 『日本文化の多重構造』, 小学館. など. 佐々木氏は日本の植生と文化の発達、さらに経済システムの相関まで概観している.

- (3) 安田喜憲 (1987). 『世界史の中の縄文文化』, 雄山閣出版など.
- (4) 1962年にレイチェル・カーソンが『沈黙の春』を刊行し多くの人に自然環境の破壊を認識させたことから環境問題に体系的にたちむかおうとする思想が登場してきた. 海上知明 (2005). 『環境思想』, NTT出版, 82頁.
- (5) 詳細は海上『前掲』.
- (6) ただしバリー・コモナーのみは例外的に小規模化に対して否定的である.
- (7) Rene Dubos (1972). *A God Within ; A positive philosophy for a more complete*, New York, Scribner, p.6. ルネ・デュボス, 長野敬／新村朋美訳 (1974). 『内なる神』, 蒼樹書房, (1974)., 3頁.
- (8) *Ibid.*, p.24. 『同上』, 18頁.
- (9) *Ibid.*, p.8. 『同上』, 5頁.
- (10) *Ibid.*, p.24. 『同上』, 18頁.
- (11) *Ibid.*, p.10. 『同上』, 6頁.
- (12) *Ibid.*, p.6. 『同上』, 49頁.
- (13) *Ibid.*, p.92. 『同上』, 75頁.
- (14) *Ibid.*, p.69. 『同上』, 56頁.
- (15) *Ibid.*, p.49-50. 『同上』, 40頁.
- (16) Jean=Paul Ribe(ed), *Pourquoi les ecologistes font-ils de la politique?* de Seuil (1978). ジャン=ポール・リブ編, 辻由美訳 (1982). 『エコロジストの実験と夢』, みすず書房, 67頁.
- (17) 飯塚浩二 (1968). 『地理学方法論』, 古今書院, 105頁.
- (18) たとえば Serge Moscovics, Sacha Rabinovitch (tr.) (1976). *Society against Nature : The Emergence of Human Societies*, Atlantic, Hig-hlands, Humanities Press (セルジュ・モスコヴィッシ, 久米博／原幸雄訳 (1984). 『自然と社会のエコロジー』, 法政大学) や Serge Moscovici (1982). *Michael Bischoff, Versach uber die menschliche Geschte der Natur*, Suhrkamp (セルジュ・モスコヴィッシ, 大津真作訳 (1988). 『自然の人間の歴史 (上) (下)』, 法政大学) などでは社会の発達が自然環境を変化させたことを述べている.
- (19) 人跡未踏の「原野」に価値をおく思想. 米国のロマン派文学者であるヘンリー・ディヴィッド・ソローなどより派生したが、ソロー自身は文明を否定していない.
- (20) Rene Dubos, *op,cit.*.p.194. ルネ・デュボス『前掲』, 158頁.
- (21) *Ibid.*, p.153. 『同上』, 125頁.
- (22) *Ibid.*, p.154. 『同上』, 126頁.
- (23) *Ibid.*, p.158. 『同上』, 129頁.
- (24) Roderick Nash (1989). *The Rights of Nature ; A History of Environmental Ethics*, Madison, The University of Wisconsin Press, p.97. ロデリック・F・ナッシュ, 松野弘訳 (1993年). 『自然の権利－環境倫理の文明史』, TBSブリタニカ, 196頁.
- (25) Rene Dubos, *op,cit.*.p.280. ルネ・デュボス『前掲』, 229頁.
- (26) *Ibid.*, .p.216. 『同上』, 175頁.
- (27) *bid.*, p.219. 『同上』, 179頁.
- (28) 地球を一つの生命体ガイアとみなしたラヴロックは、ガイアの自浄作用によって多少の環境破壊は克服できるものとみなした.
- (29) E. F. Schumacher (1974). *Small is Beautiful*, Abacus, p.22 エルンスト・フリードリッヒ・シューマッハ, 小島慶三／酒井懋訳 (1986年) 『スモール・イズ・ビューティフル』, 講談社, 46頁.
- (30) E. F. Schumacher (1977). *A Guide for the Perplexed*, Harper & Row, (エルンスト・フリードリッヒ・シューマッハ, 小島慶三／斎藤志郎訳 (1980年). 『混迷の時代を超えて』, 佑学社, 219頁. この部分は、現在入手可能な原書には掲載されていない.
- (31) Alan Drengson & Yuichi Inoue (ed.) (1995). *The Deep Ecology Movement*, alifornia, North Atlantic Books, p.7. アラン・ドレグソン／井上有一編, 井上有一訳 (2001) 『ディープ・エコロジー－生き方から考える環境の思想』, 昭和堂, 37頁.
- (32) E. F. Schumacher, *Small is Beautiful*,.p.50. エルンスト・フリードリッヒ・シューマッハ 『スモール・イズ・ビューティフル』, 87頁.
- (33) エルンスト・フリードリッヒ・シューマッハ『混迷の時代を超えて』, 220頁. この部分は、現在入手可能な原書には掲載されていない.
- (34) Juan Martinez-Alier (1987). *Ecological Economics ; Energy Environment and Society*, Basil, Blackwell Publisher,.p.40. ホワ

- ン・マルチネス＝アリエ, 工藤秀明訳 (1994)『エコロジー経済学』新評論, 77 頁.
- (35) T. O'Riordan, (1976), *Environmentalism*, London, Pion Limited, p.113.
- (36) E. F. Schumacher *Small is Beautiful*, p.42. エルンスト・フリードリッヒ・シューマッハ『スモール・イズ・ビューティフル』, 75 ページ.
- (37) E. F. Schumacher (1979) *Good Work*, London, Jonathan Cape, p.105. エルンスト・フリードリッヒ・シューマッハ, 長洲一二／伊藤拓一訳 (1980).『宴のあとの経済学』, ダイアモンド社, 127 頁.
- (38) E. F. Schumacher, *Small is Beautiful*, p.84. エルンスト・フリードリッヒ・シューマッハ『スモール・イズ・ビューティフル』, 84 頁.
- (39) F. Schumacher, *Small is Beautiful*, p.84. エルンスト・フリードリッヒ・シューマッハ『スモール・イズ・ビューティフル』, 84 頁.
- (40) E. エルンスト・フリードリッヒ・シューマッハ『混迷の時代を超えて』, 201-202 頁. この部分は、現在入手可能な原書には掲載されていない.
- (41) エルンスト・フリードリッヒ・シューマッハ『混迷の時代を超えて』, 202 頁. この部分は、現在入手可能な原書には掲載されていない.
- (42) Carolyn Merchant (1992) *Radical Ecology ; The Search for a Livable World*, New York, Routledge, Chapman & Hall., p.297. キャロリン・マーチャント, 川本隆史／須藤自由児／水谷広訳 (1994).『ラディカル・エコロジー』, 産業図書, 218 頁.
- (43) Alan Drengson & Yuichi Inoue (ed.), *op.cit.* p.116. アラン・ドレグソン／井上有一編, 井上有一訳『前掲』, 183 頁.
- (44) Carolyn Merchant, *op.cit.* p.218. キャロリン・マーチャント『前掲』, 300 頁.
- (45) Andrew Dobson (ed.) (1991) *The Green Reader*, San Francisco, Merccury House., p.78. アンドリュー・ドブソン編 (1999).『原典で読み解く環境思想－グリーン・リーダー』ミネルヴァ書房, 74 頁.
- (46) Alan Drengson & Yuichi Inoue (ed.), *op.cit.* p.117. アラン・ドレグソン／井上有一編『前掲』, 183 頁.
- (47) Andrew Dobson (ed.), *op.cit.* pp.78-79. アンドリュー・ドブソン編『前掲』, 73 頁.
- (48) *bid.*, p.79.『同上』, 74 頁.
- (49) *bid.*, p.79.『同上』, 73 頁.
- (50) Alan Drengson & Yuichi Inoue (ed.), *op.cit.*, p.69. アラン・ドレグソン／井上有一編『前掲』, 97 頁.
- (51) Andrew Dobson (ed.), *op.cit.*, p.79. アンドリュー・ドブソン編『前掲』, 75 頁.
- (52) *Ibid.*, p.79.『同上』, 75 ページ.
- (53) カークパトリック・セル, 鈴木昭彦訳 (1990).「土地に住むものたち－バイオリージョン的未来」『環境思想の系譜 2－環境思想と社会』東海大学, 137 頁.
- (54) 「同論文」, 138 頁.
- (55) 「同論文」, 139 頁.
- (56) 「同論文」, 138 頁.
- (57) 「同論文」, 137 頁.
- (58) 「同論文」, 139-141 頁.
- (59) Donald Worster (1994). *Nature's Economy ; A History of Ecological Ideas (2ed)*, Cambridge University Press, p.471. ドナルド・オースター, 中山茂／成定薫／吉田忠訳 (1989).『ネイチャーズ・エコノミー－エコロジー思想史』, リポート, 430 頁.
- (60) Andrew Dobson (ed.), *op.cit.*, p.81. アンドリュー・ドブソン編『前掲』, 77 頁.
- (61) *Ibid.*, p.83.『同上』, 79 ページ.
- (62) Carolyn Merchant, *op.cit.*, pp.221-222. キャロリン・マーチャント『前掲』, 302 頁.
- (63) Andrew Dobson (ed.), *op.cit.*, p.82. アンドリュー・ドブソン編『前掲』, 78 頁.
- (64) Alan Drengson (ed.), *op.cit.*, p.116. アラン・ドレグソン編『前掲』, 182-183 頁.
- (65) Jeremy Rifkin (1992), *Biosphere Politics : A Cultural Odyssey from the Middle Ages to the New Age*, New York, Collins, p.291. ジェレミー・リフキン, 星川敦訳 (1993).『地球意識革命』, ダイアモンド社, 319-320 頁.